

「我々の将来は約束されていない、切り開いて進むのだ」

公益社団法人埼玉県診療放射線技師会
会長 小川 清



昭和26年11月、18名の技師が埼玉県エックス線技師会を立ち上げた。その後、本会は昭和63年4月の社団法人、そして平成24年4月公益社団法人へと職能団体として着実に前へ進んできた。一方診療放射線技師職種としては、X線技師から放射線技師と名称が変わっても、関与する法律は昭和26年に制定されたままであり、医療の進歩、特に医療機器の進歩にそぐわなくなっている。この間、関係者は幾度も技師法改正に取り組んできたが、小さな職種の法律など、いつも後送りされてきた。法律を作る国会に同業である仲間を送り込まないと、この問題は解決しないことは十分過ぎるほど分かっていたが、状況が整わず現在までできてしまった。でも、やっと希望の光が見えつつある。

我々は業務においておかしいことはおかしいと、相手のみならず自分にも発言し続けなければいけない。例えば検診車への医師同乗問題など、現行法に照らせば法律違反になり「寝ている虎を起こさない方がよい」という考えもあるが、やはりどう考えても「検診における診療放射線技師業務が危険であり、医師の指示が必要」とは誰も思わないだろう。検診以外にも我々が仕事をしている多くの場面で同様な状況が存在するが、まず自分達の中で寝ている虎を起こし、長年続けてきた仕事に対する意識を変えていかねばならない。その視点は、自分目線ではなく患者中心、国民目線の判断が問われる。そしておかしいと発言すれば、当然向こう岸の強い意見も出て軋轢も生まれるだろう。そこは大人の対応をして、現在の検診業務における安全性評価と国民視点の考え方を照合し、法律改正を発言し続けることが求められる。

診療放射線技師による読影は、世の流れであると認識している。そして学生教育まで考えなければ

いけないので、10年のスパンが必要という世代間的な発想が求められる。本会には、読影という課題に15年以上前から積極的に切り開いてきた先輩諸氏がいたことを日本診療放射線技師会誌5月号、インナービジョン7月号を読んで確認してほしい。多くの軋轢もあったと想像するが、ゴールを目指して、わずかに見える希望と診療放射線技師としての使命を感じて切り開いてきたと想像する。

そしてこれからである。二つの教訓を挙げたい。「やっつけ仕事をするな」と「独りよがりになるな」である。やっつけ仕事とは、仕事を始めた当初や、途中までは真剣に取り組んでいても、最後には面倒になったり、適当に仕上げる仕事の仕方であり、そういったやり方で済ませた仕事のこと。独りよがり自分だけでよいと思い込んで発言や行動をするが、他人の意見を無視して聞く耳をもたないこと。共に医師からオーダーを受ける医療従事者に多くあるパターンであり、責任感のある自立性を高めるプロフェッショナル・スピリットが求められる。

総会を終えて、また1年間の技師会活動が始まる。心を新たにしていって邁進したいと思う。事業的に大幅な変化はないが、同じルールではなく新しい道を模索し切り開いて進もうと考えている。それは古いものを新しく換えることではなく、古いものに新しいものを付け加えていくことが我々の使命と感じ、ゴールを目指し切り開く摩擦熱を役員全員で感じながら前に進めたい。本年も昨年と同様に県民と会員が期待する職能団体を目指して理事一同全力で走る。ご支援のほどよろしく申し上げます。

夢なき者に理想なし、理想なき者に計画なし、計画なき者に実行なし、実行なき者に成功なし。故に、夢なき者に成功なし。

(吉田松陰)